

## 周産期看護と異文化コミュニケーション研究 パートⅡ

### － 日系ブラジル人の事例を通して －

久保田君枝

## A study of the perinatal period nursing and the cross culture

### Communication Part II

### － Through the case of Brazilian in Japan －

KUBOTA, Kimie

#### I はじめに

昨年に継続して、周産期にある在日ブラジル人への異文化看護と異文化コミュニケーションの現状を周産期にある在日ブラジル人の事例を通して、現状と問題を考察することを目的に聞き取り調査を行った。

調査対象はH市のK病院とKクリニックとA市のIクリニックの3ヶ所を受診した13名。この3施設はポルトガル語の通訳の方が同席して聞き取り調査ができることと在日ブラジル人が口込みで紹介している施設であることから調査対象とした。

聞き取り調査は妊娠20週から出産前までに1回と出産後1ヶ月健診までに1回、計2回おこなった。聞き取りの対象者の日本語能力に個人差があり、聞き取り方法に通訳を介しての聞き取りであったりしたため、聞き取り内容に限界のある中での情報であった。

H市のブラジル人登録者数は1990年には僅か1457人であった。2003年3月末には12,111人<sup>1)</sup>さらに、1年後の2004年2月末では13,175人（H市国際課調べ）と1,064人の増加がみられた。

これは、市が国際的な輸送機器メーカーや楽器メーカーの企業と製造業の街として知られ、労働市場があるため、入管法改定後から引き続きブラジル人が増加している。さらに、日本の経済状況が厳しい状態にあるのと同様に、H市も不況のあおりを受けていることから、滞在期間の長期化や家族滞在の増加に起因している。その結果、在日ブラジル人の出産が増加している。

在日ブラジル人が異文化の下で出産することは「ことばの壁」「生活習慣の違い」「文化の違い」などから不安や戸惑いを持つことを予測していた。しかし、入国管理法改定後から10余年経過し、医療者側や受診者側も異文化を持った者同士の関係において、時間の経過と共に異文化への理解と慣れが異文化看護や異文化コミュニケーションの関係づくりができつつあるように思える。また、周産期において在日ブラジル人が共通して抱えている問題は僅かであり、日本で周産期を過ごすことに安心感が持てるようになったのも異文化コミュニケーションが良い関係にあるためと思える。ただし、この調査対象の事例は14夫婦のみであることから、情報に限界のあることを含めてまとめたことを一言添えておく。

#### II 研究方法

- 1, 調査対象はH市とA市に在住している周産期にある日系ブラジル人。
- 2, 調査方法は、質問紙による面接、聞き取り調査、調査内容をMDに録音した。調査は1総合病院と

2ヶ所のクリニックを訪問し聞き取り調査を行った。ただし、使用言語がポルトガルのために聞き取りができない場合はブラジル人通訳者の同席の下で聞き取り調査を行った。

聞き取りの時期は、妊娠20週から出産前までに1回と出産後1ヶ月健診までに1回、計2回行い、不足情報は電話にて情報収集した。出産前の事例は継続して聞き取り調査を実施する。

3. 調査期間は、平成15年8月～平成17年3月まで。
4. 調査内容は久保田<sup>2)</sup>の「周産期にある在日ブラジル人への看護の現状と問題点」の調査項目を基に一部変更、追加して以下の内容とした。「事例の背景」「妊娠について」「出産、産後について」「子育てについて」の主に4項目である。聞き取り内容は、MDに納め、再生を行いまとめた。
5. 倫理的配慮は調査前に静岡県立大学倫理委員会を通し、了承を得た後、調査対象に調査の目的を説明し、了承を得た対象に「研究参加同意書」と「通訳に守秘する旨の確約書」を書いてもらった。MDの録音も同様に了承を得て行った。データは全て個人情報であることから秘密を厳守した。

### III. 結果

#### 1. 事例の背景

13組の事例の背景は、年齢は夫：21歳～44歳、妻：19～34歳である。夫の平均年齢は31.1歳、妻の平均年齢は26.1歳である。結婚生活は最短が1年～最長12年。子どもの数は1人～3人。日系2世～3世、出身地はサンパウロ州とパラナ州である。日本での滞在期間は夫：4年～12年、妻：2年～11年、滞在予定を決めていないは5組、一時滞在が4組、長期滞在は4組である。宗教を持たないは2人、カトリックは9人、仏教が2人であった。

仕事の有無は夫：全員有職者であるが、妻の有職者は2人であり、無職が11人であった。産後に仕事を考えている人が1人であった。

雇用形態は正社員4人、時間給11人。就労時間は日勤5人、日勤と夜勤8人、その他3人。雇用関係は直接雇用2人、派遣業者は11人、その他2人。健康保健の未加入は2人、他の者は国民健康保険7人、社会保険2人、海外保険1人、未記入1人であった。

日本語の聞き取りと日常会話：夫はよくできる6人、まあまあできる6人、できない1人、妻はよくできる4人、まあまあできる7人、できない2人であった。日本語の読み書き：夫はよくできる2人、まあまあできる7人、できない4人。妻はよくできる1人、まあまあできる8人、できない4人であった。

学歴は夫：大学卒1人、大学中退1人、高校卒6人、中学卒3人、中学中退1人、不明1人。妻は大学卒1人、高校卒6人、高校中退2人、中学卒4人であった。

日本に来てことばによる困ったと答えた11組のうち、困った理由は電車の乗り方がわからなかった。会話のことばがわかってもらえなかった。ことばがわからないために仕事の内容が理解できなかった。

今、大切にしていることは家族（夫と子ども）が8組、健康と子どもが3組、友人1組、わからない1組であった。

#### 2. 妊娠について

妊婦健診の受診のきっかけは、友人の紹介7組、良い病院2組、家族が日本にいるため2組、病院が近くだから1組、夫が案内を見て決めた1組。

出産場所を決めた理由に親が日本にいるため3組、夫や娘が日本にいるから2組、日本での出産は安心だから5組、友人の紹介2組、子どもの国籍を二重国籍にしておきたい1組。

母親になる自覚につながったものは胎動が3人、胎児の写真を見て3人、お腹が大きくなって意識した2人、妊娠がわかって自覚に繋がった4人、計画出産1人であった。

妊娠とわかって気をつけていたこと体重増加に気をつけた5人、食べ物（カルシウムや鉄分）に気をつけた4人、重い物を持たない1人、転ばないように歩き方に気をつけた1人、乳房の手入れをした1人、本や母親学級で確認した1人であった。

妊娠中の情報の入手方法は友人から6人、ポルトガル語の雑誌から7人、親から5人、テレビから2人、インターネットから2人、助産師、夫、母親学級から各1人であった。

母親学級に夫婦または1人で参加した9組、未受講1組、未記入3組であった。

#### 3. 出産、産後について

13組のうち8組が出産した。初経産別では初産婦は1人、他は経産婦7人である。骨盤位のために帝王切開術1人、他は自然出産であった。出産場面で困ったことは陣痛が痛くて辛かった1人、他の人は困ったことがなかった。

保健指導については役に立った2人、産後の沐浴指導が役に立った1人、上の子の出産経験から理解していた4人、沐浴指導が実際にできて良かった1人であった。

夫の協力はオムツ交換2人、家事に関する協力は4人、上の子の世話1人、相談相手1人であった。

夫以外の生活支援者は実母、義母は4人、父親1人、両親1人、娘1人、近所のブラジル人1人であった。相談者は親、姉妹、友人など相談者を決めていた。

#### 4. 子育てについて

子育ての情報はH市情報誌「広報H」から得た5人、保健所から5人、友人3人、インターネット1人などから情報を得ている。子どもの健診や予防接種の情報は保健所から7人、H市情報誌「広報H」から5人、母子健康手帳から2人、友人から4人、小児科の医師から1人、育児の本から1人であった。情報は正確な情報の得られやすい情報源から得ている。H市はH市情報誌「広報H」や保健所からの情報はポルトガル語に翻訳されているものが多く、自由に手に入れやすくなっている。その結果、利用しやすくなったことと、在日ブラジル人はよく利用している。また、保健所には日系ブラジル人のポルトガル語と日本語がバイリンガルに話せる通訳が常駐していることも、利用しやすくしていることの1つになっている。

子どものことばの教育はバイリンガルに育てたいと考えている親は5人、ポルトガル語で育てたい3人であった。ブラジル人として子育てをして行きたいと考えている親4人、日本人として子育てたいと考えている1人、両方の国の良いところを取り入れて子育てをしたい3人であった。

今、心配なことは子どもの健診、予防注射、離乳食に関すること2人、子どもを保育園に預けるのが寂しい1人、経済的な理由1人、A市は通訳がないので不自由を感じている2人であった。

## IV. 考察

### 1. 対象の背景

本研究の13組中、5組が滞在期間を決めていない、長期滞在が3組になっているように在日ブラジル人の滞在期間が長期化の傾向になっている<sup>3)</sup>。これは、日本経済が不況にあり、雇用の減少や雇用の解雇などが原因の一つであるが、ブラジルの経済も不安定な状態にあることが滞在期間の長期化に繋がっている。13組の滞在期間が2年から12年という期間がそのあられでもある。H市国際室「外国人の生活実態意識調査～南米日系人を中心に～2000,3」<sup>4)</sup> 調査によると7年以上の滞在が45.5%と約5割の報告であった。

雇用形態や雇用関係から健康保健の加入状況はH市の在日外国人の健康保健の加入<sup>4)</sup>は約3割強であることから、本研究の加入が13組であったことは加入状況からは恵まれた対象である。ただし、未加入の1事例は子どもがいる事から加入が必要であるが、社会保険の加入が義務化される<sup>5)</sup>から受診しやすくなる可能性がある。

日本語の聞き取りと会話は26人とも困らない状況にあるが周産期の医療内容になると専門的なことばや未体験の内容になると理解できない場面があるが、ことばに自信のない夫婦は日本語能力の高い家族や友人、通訳の人と同伴で受診している。これは在日ブラジル人が事前にことばへの対応を友人や知人を介して通訳のできる人を自ら選択して受診しているため、ことばに困る状況が生じないように事前に準備している。しかし、病院に通訳をおいてほしい、ポルトガル語の話せる医師をおいてほしい等の要望も少数ではあるがあった。5年前の先行研究<sup>2)</sup>ではことばの問題に関係していることが多く、ことばの対応として通訳を置いてほしいという声が多かった。現在、H市内の3ヶ所の総合病院や市役所、保健所に通訳をおいていることもあり、ことばの問題の状況が変わってきている。

日本に来て困ったことはことばの問題に集中している。日本に来て間もない時期の問題が多く、買い物一つするにも苦労が多かった。中には仕事の内容の説明が理解できなくて困ったなど、当初はことばの壁によるコミュニケーションギャップがあったが、滞在期間が長期化することによって、日本語能力が徐々に高くなることによって適応できてきている。

## 2. 妊娠について

妊娠に気づいて始めて受診する病院は在日ブラジル人のコミュニティの友人や知人の紹介で産科に関する情報を下に選択している。8 事例とも友人や知人からの情報を下に決めている。事例との面接の中にも病院やクリニックに関する幾多の情報を聞いたが、細部に渡る内容まで知っていることから、コミュニティの中で情報交換が盛んに行われ、産科に関すること以外の生活に関する情報も得ている。

出産場所を日本にするかブラジルにするかを決定する考えの基準に「夫の側で家族と共に出産を迎えたい」と考えている。ブラジル人は家族の繋がりを大切にしている表れの結果である。もう一つは「ポルトガル語が話せる先生がいること」をあげている。異文化の下で、異文化を持った者が周産期を迎えることは周産期の専門的な知識が必要になることから、周産期のコミュニケーションをとるためにはことばが重要であることがいえる。ただし、井上の報告<sup>6)</sup>によると「ことばができなくても一生懸命伝えようとするし、話しを聞こうとしてくれるこれが良い病院といわれている。」このことからコミュニケーションはことばだけではなく相手の気持ちに向き合う姿勢が大切のように思う。

新道<sup>7)</sup>は「母親意識や母性意識は妊娠の体験を通して高められていく」と述べているように母親になると自覚したものは、胎動、胎児の写真、お腹の膨らみが母親の自覚を高める体験に繋がってなっている。

妊娠中に気をつけていることは食事、運動、睡眠、規則正しい生活を送るように心掛けている。これは、元気な子どもを産むことが親の希望であり、責任と考えていることは日本人もブラジル人も同じである。

## 3. 出産、産後について

出産時、産後に困ったことは初産婦の1人以外は経産婦のため、上の子どもの周産期体験から困ったことがあげられていなかった。周産期の体験は出産時や産後の保健指導の説明などよりも産婦への安心感に繋がっている。産後に夫以外の支援者は親、姉妹、友人などブラジル人が大切にしている家族、友人が子育ての良き支援者になっている。

在日ブラジル人はコミュニティの中での友人関係がしっかりしているのため、必要な時には応援体制が取りやすい関係にある。

## 4. 子育てについて

子育ての情報はインターネット、H市情報誌「広報H」、友人、保健所などから情報を得ている。子どもの健診や予防接種の情報はH市情報誌「広報H」や保健所など正確な情報が得やすい情報源から得ている。それは、H市情報誌「広報H」はポルトガル語版が用意されていることや一世帯に一誌配布されている。それ以外は公共施設や国際交流協会、ブラジル銀行、ブラジル雑貨店などに置いているので、在日ブラジル人が利用しやすい状況にあるためである。西田<sup>8)</sup>は「異文化滞在者が、受け入れ文化における対人コミュニケーション・スキーマの間の関係についての情報を得ることは、異文化適応への必要条件である」と述べている。その点からも、正しい情報をタイムリーに的確に情報を提供できるように医療者は心掛ける必要がある。

子どものことばの教育はバイリンガルに育てたいと考えている親が多いのは、「デカセギ」に来て、日本語能力の差によって社会との繋がりに温度差が生じたり、収入の格差が歴然と表れているため、子育てのことばはバイリンガルに育てることが子どもの将来に役立つと考えているからである。

何国人として育てたいかはブラジル人として育てたいと考えている。日系ブラジル人として育てたいは1組だけであった。これは異文化滞在者であるため、日系ブラジル人であってもブラジル人の意識を持って生きている姿勢が子育てに反映している。異文化の中での異文化理解は親のアイデンティティと直結していることから、子育てには親のアイデンティティが反映される。

## V. まとめ

1. 在日ブラジル人の滞在期間が長期化の傾向になっているように、滞在期間を決めていないなど長期の滞在になっている。これは、日本経済が不況にあり、仕事量の減少や雇用の解雇などが原因の一つであり、ブラジルの経済も不安定な状態にあることが滞在期間の長期化に繋がっている。
2. 日本語の聞き取りと会話の状況は 26 人とも困らない状況にあるが周産期のことになると専門的なことばや未体験の内容になることから理解できない場面があるが、ことばに自信のない夫婦は日本語

能力の高い家族や友人、通訳の人と同伴で受診している。これは在日ブラジル人が事前にことばへの対応を友人や知人を介して通訳のできる人を自ら選択して受診しているため、ことばへの対応ができている。

3. 良い病院の条件に井上の報告<sup>6)</sup>にあるように「ことばができなくても一生懸命伝えようとするし、話を聞こうとしてくれるこれが良い病院といわれている。」このようにコミュニケーションはことばだけではなく、相手の気持ちに向き合う姿勢が求められている。
- 4 .妊娠に気づいて始めて受診する病院は在日ブラジル人のコミュニティの友人や知人から産科に関する情報を下を選択している。8 事例とも友人や知人からの情報を下に決めている。さらに、ブラジル人は家族の繋がりを大切にしているため、夫の側で家族と共に出産を迎えたいという思いがあり日本での出産を考えている。
5. 子育ての情報はインターネット、H市情報誌「広報H」、友人、保健所などから情報を得ている。子どもの健診や予防接種の情報はH市情報誌「広報H」や保健所など正確な情報が得やすい情報源から得ている。それは、H市情報誌「広報H」はポルトガル語版が用意されていることや一世帯に一誌配布されている。それ以外は公共施設や国際交流協会、ブラジル銀行、ブラジル雑貨店などに置いているので、在日ブラジル人が利用しやすい状況にある。

#### 引用・参考文献

- 1)浜松市総務部広聴広報課,浜松市市勢要覧,29,2002
- 2)久保田君枝,周産期にある在日ブラジル人への看護の現状と問題点,修士論文,1998
- 3)池上重弘,ブラジル人と国際化する地域社会,明石書店 27,51,2001
- 4) 浜松市国際室,外国人の生活実態意識調査～南米日系人を中心に～3,10,2000
- 5)http-www.syakaihoken.html 社会保険・労働保険 2004.3.15
- 6)井上千尋,『助産婦雑誌』 どう援助していますか。外国人妊産婦,医学書院,2000
- 7)新道幸恵,母性の心理社会的側面と看護ケア,医学書院,109-113,1990
- 8)西田ひろ子,異文化間コミュニケーション,創元社,120,2000
- 9)岡部 朗一他,異文化コミュニケーション,有斐閣選書,1999
- 10)李 節子,在日外国人の母子保健,医学書院,1998
- 11)渡辺雅子,出稼ぎ日系ブラジル人上下,明石書店,1995
- 12)鍋倉 健,日本人の異文化コミュニケーション,北樹出版,1995
- 13)ワスニナ・モニカ・孝子,『看護』外国人への看護,日本看護協会出版会,1995
- 14)古田 暁,“異文化コミュニケーション”,有斐閣,1999
- 15)中島ヒロコ,『現代のエスプリ.コミュニケーション学』,国際交流のコミュニケーション,至文堂,2002
- 16)浜松多文化共生委員会,誰もが健康に暮らせる社会を目差して,浜松 NPO ネットワークセンター,2001